

できることから始めよう！

～心を一つに、きっかけづくりから～

松前さくら漁業協同組合女性部

丹羽 千穂子

1. 地域の概要

松前町は、渡島半島の日本海側に面した、海岸線67kmを有する人口約1万1,000人の漁業の町である。北海道の最南端に位置しているため、対馬暖流の影響を受け温暖な気候にあり、春には桜が咲き誇り、松前城や桜公園を訪れる客で賑わう観光名所である。

2. 漁業の概要

私達の所属する組合は、平成元年と6年の二度の合併により、5JFから松前さくら漁業協同組合となり、18年現在、正組合員は437名となっている。主な漁業は、沖合ではマグロ延縄、イカ釣、刺網、沿岸では、ウニ・アワビ・コンブ等の採介藻漁業が行われており、18年現在で生産高は、数量4,892トン、金額21億7,000万円となっている。

3. 研究グループの組織と運営

組合が合併により一つになったにも関わらず、女性部は実質的には旧5JFのまま残り、各地区でそれぞれ運営されてきた。活動費は、会費と組合からの助成金で賄っており、現在加入部員数は101名となっている。活動は、女性部全体としては、組合・JFグループ事業や町内のイベント等への協力が主となっており、各地区での取り組みとしては、地元のお祭等への参加協力である。

4. 研究・実践活動取り組み課題選定の動機

各地区それぞれでの活動が続いていたため女性部同士の交流が少なく、女性部全体の動きはなかった。また、松前町内の婦人会や各種団体との交流も少なく、周囲からの漁協女性部の必要性等、活動への理解は低かった。『こんなことで良いのだろうか？』と、話題となることもあったが、自分達からは何も変わることは出来なかった。しかし、水揚げ高の減少により平成19年から組合の再建計画の見直しが行われることになり、18年1月に組合から数年後には女性部の一本化を図る考えが示された。この機会を逃しては、『いまままで何も変わらない』と危機感を抱いた私達は、『女性部として何が必要なんだろう』と各地区の役員が集まり、18年度からの活動方針について相談を重ねる日々が続いた。

そのような中から、『原点に帰り、できることから始めよう』『周囲と交流し、私達の活動を分かってもらおう』と意見がまとまり、具体的な課題の模索が始まった。自分の頭の中には、あれもやりたい、これも・・・で整理がつかなかったが、毎月巡回に来る指導所に相談し課題を絞り込み、自分達の前浜に普通にあるものに着目し、まず、活動のきっか

けとして「海藻おしばづくり」と「ホッケいずしづくり」に取り組むことにした。そして、女性部でやったことは、周囲にどんどん情報発信しながら、『自分達が元気に活動し、それを伝えていこう』と、心を一つに地域の活性化を目指すことで方針がまとまった。

なお、海藻おしばは、平成19年度からのJFマリンバンクの環境保全啓発活動のPR用の葉に使われていることが分かり、「海藻おしばづくり」の課題選定に自信が深まった。

5. 研究・実践活動状況及び成果

活動資金が少なかったので、組合、町にお願いし、支庁の平成18年度担い手活動支援事業（漁村女性活動促進事業〈交流学习・地域漁獲物付加価値向上指導〉）に申請し、その予算で用紙や機器等を購入して取り組んだ。

(1) 海藻おしばづくり（交流学习）

第一回目は、指導所さんに講師になってもらい、私達女性部だけを対象に開催した。初めは、見よう見まねで不安一杯だったが、乾燥4日目で出来上がった「おしば」を見て、その素晴らしさに参加者全員が今までにない感動を味わった。『これならできる』『意外といけるんでないかい』等の感想が多く聞かれ、交流学习に向け準備を進めた。

第二回目は、町内の「押し花サロン」というサークルの人達との交流学习として開催した。女性同士、おしゃべりをしながらの「おしばづくり」だったが、それが良い意見交換となり、また、お互いに教え合うことができ大変勉強になった。交流の中から、おしばの図柄や配置等のアイデアが浮かんで来るようになり、部員は少しずつ活動に対して自信が持てるようになった。また、『食べられる海藻もあるよねえ〜』『何とか出来ないか』と前浜を見直す意見や活動へのヒントも多く出された。

このように取り組んだ活動内容と「おしば」の素晴らしさを知ってもらおうと、町広報誌への掲載や地元小学校への紹介、町民文化祭での展示等、機会がある度に女性部活動をPRし、地域の活性化につながるよう情報発信やおしばづくりの活動を続けた。

(2) ホッケいずしづくり（地域漁獲物付加価値向上指導）

各漁家では古くからいずしづくりが続けられていたが、分量や製造方法がまちまちで、特に衛生管理に対しては、全く無頓着という状態であった。そこで、誰でも同じように作ることができ、しかも安心で安全な製品を目標にいずしづくりに取り組んだ。

講師は、道立食品加工センターにお願いし、衛生管理講習会といずし加工実習を開催した。漬け込み後、約2週間は、食中毒の判断基準となるペーハーや塩分測定を行い、熟成状況を把握した。結果的に、細菌の繁殖の可能性が高く危険性があるいずしと判断された。その原因は、前処理の段階で従来からの勘に頼り、レシピどおりの原料割合でなかったという初歩的なものであった。私達は、この悪い結果を実体験することによって、安心で安全な加工製品の提供がいかに重要で、難しいかの認識を持つことができた。いずしの商品化は、今の私達には無理であり、簡易乾燥製品が適していると思われた。

活動のきっかけとして始めたこの二つの共通の取り組みによって、今までにないほど部員間の連携や連絡体制が強まり、また、海藻類等の前浜資源の素晴らしさを再認識する事ができた。部員からは、初めて『地域の元気のために、みんなでやってみよう』と意見が出されるようになった。顔を合わせる度に『次は何をやるか』『具体的に考えてみよう』等、部員の中に地域のために何か貢献できないかという共通の意識が芽生え始めた。

「海藻おしばづくり」については、18年度渡島支庁管内漁業士会・女性部・青年部合同

研修会と第53回渡島漁村女性大会で事例報告の機会があったが、この取り組みは好評を得ることができ、周囲への情報発信につながった。

6. 波及効果

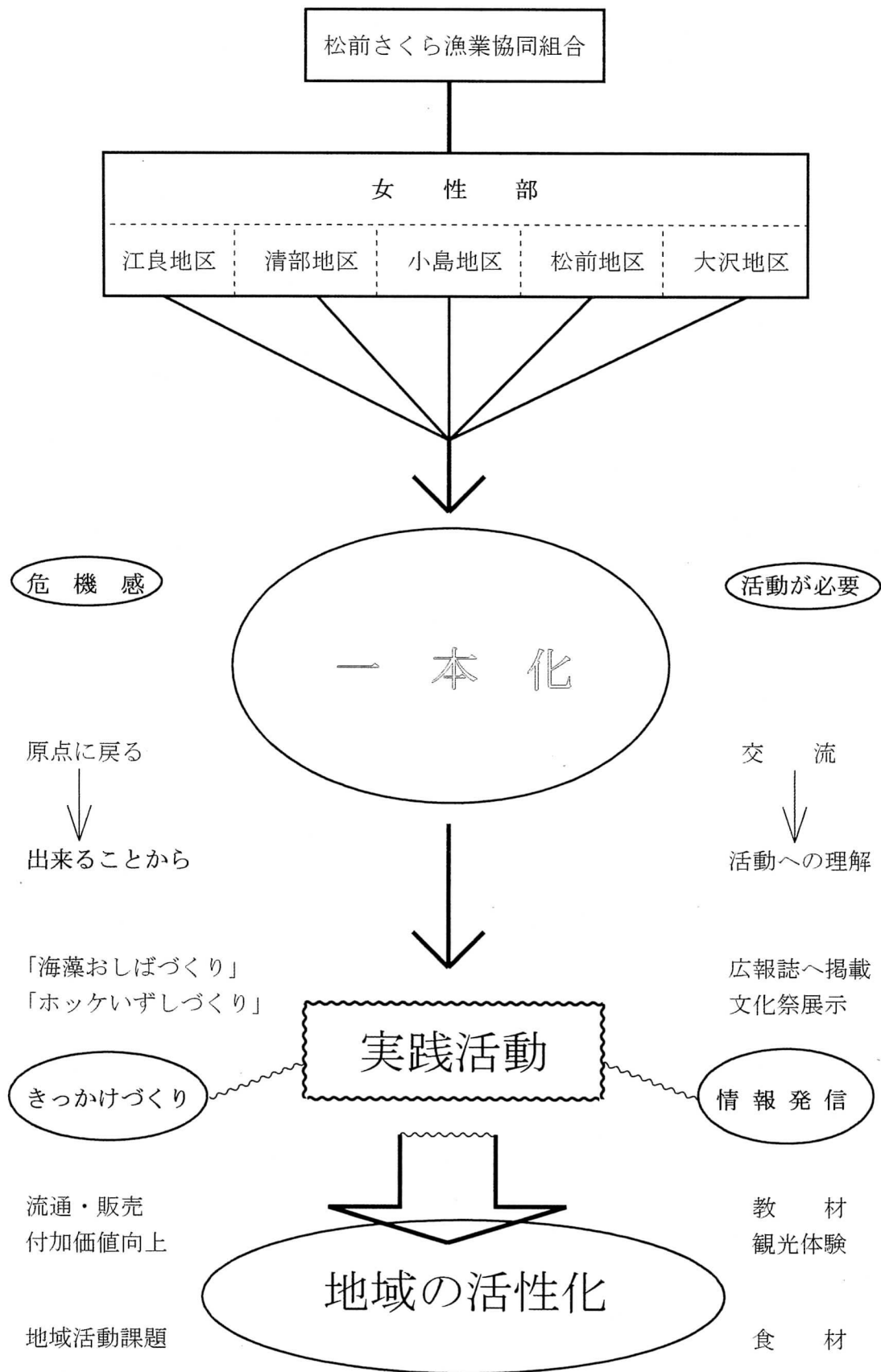
- ・ 私達の「海藻おしばづくり」の活動が話題となり、町内や近隣の漁協女性部から『どうやって作るの』『どこで教えてくれるの』等の問い合わせが寄せられ、各方面に活動が広がるきっかけとなった。
- ・ 町内では、一般町民を対象に「海藻おしば講習会」が数回開催され、病院や商店、旅館等で展示され一部販売に向けられた。さらに、前浜の資源が見直され、フノリやヒジキ等が観光地松前の食材として老舗旅館のおもてなし料理に使われ始めた。
- ・ 松前町の産業振興課では、「海藻おしばづくり」を体験観光の材料として活用することが検討された。また、教育委員会では、「海藻おしば」を水産学習に取り入れる事を進めており、一部の小学校では教材として導入された。
- ・ 隣町の福島吉岡漁協女性部では、役員を対象に講習会を開催し、部員に教えながら「おしばづくり」が継続して取り組まれている。さらに19年度には私達と同様に担い手支援事業を導入し、「栗」等のおしばの商品化を目指した取り組みが計画された。また、吉岡地区女性部では、「おしばづくり」が前浜に目を向けるきっかけとなり、以前より構想として温められていた海藻の袋詰め販売の実施を決定し、19年春からフノリ、マツモ、ヒジキ、促成コンブの若生の袋詰め販売が開始された。

このように、私達のきっかけづくりが各方面に伝わり、様々な地域活動に結びついた。自分達のできることは限られているが、やったことを上手に伝えていくことによって周囲が動き出す元気の素になったことに大きな自信を持ち、いかに情報発信が大切であるかが分かった。

7. 今後の課題や計画と問題点

女性部の一本化は、19年度を準備期間とし、20年度からの実施との結論が組合から示された。さらに、信用部が信漁連に譲渡されることになり、これまで女性部の活動の中心であった皆貯金運動への関わりが薄くなることが判明した。女性部の一本化を当面の目標とときっかけづくりを始めてきたが、今後は活動のさらなる展開が必要となった。新たな試練に直面し、部員達は何をしたらいいのか不安を抱き、以前の消極的な姿勢に戻りそうになったが、『もう一度、原点に戻ろう』『新しいことでなくても、自分達のできる事をやろう』と気を取り直し、20年度以降の具体的な活動内容を検討した。その結果、隣の福島吉岡漁協女性部の活動を参考にして、ほとんどが自賄いで消費されているフノリ、マツモ、ヒジキ、テングサ等の乾燥製品の商品化を新たな課題として計画することとした。安心で安全な付加価値向上への新たな取り組みとして、女性部の20年度事業計画に盛り込み、今度は、私達女性部自身が一つとなり実践していくことが総会で決定された。

2カ年間の活動を発表させていただきましたが、まだ、始まったばかりですし、本当にささやかな取り組みです。やっと一歩を踏み出したところです。これからも、活動の原点を忘れずに『できることから始める』を合言葉に、自分達の地域が元気になるよう心一つにして活動を続けて行きたいと思っております。皆さんの応援をよろしくお願いします。



図一 3 組織図と活動の流れ

札幌

図-1 松前町の位置図

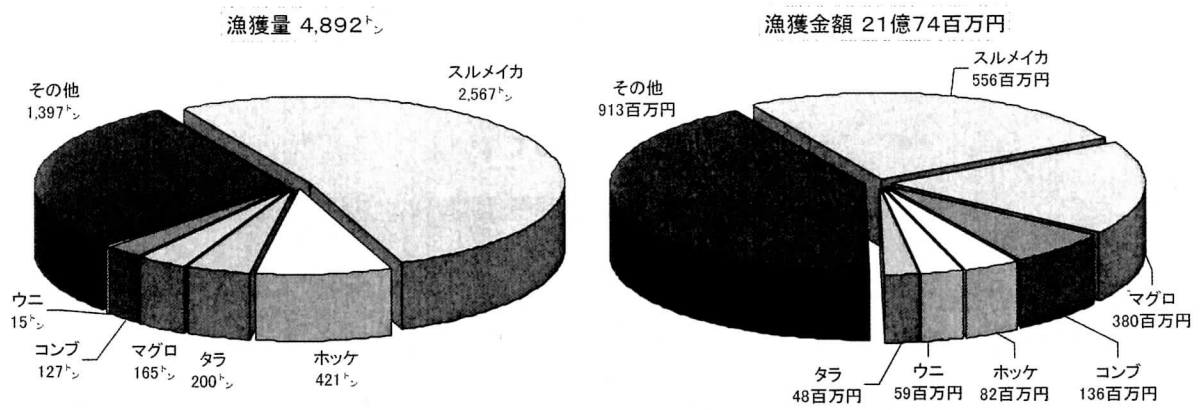


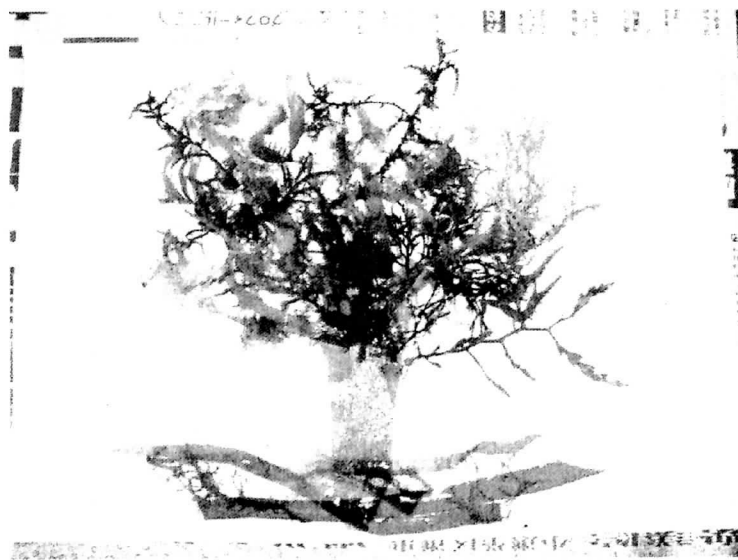
図-2 平成18年の漁業生産高



海藻おしば講習会ー① 『見よう見まねで・・・』



講習会ー② 『なんとかなりそう』



完 成 !!

『なかなかいいんでない』



押し花サークルとの交流学習
『押し花とのコラボレーション』



おしば作品を町民文化祭に展示
『見に来たかい』



福島吉岡漁協吉岡地区女性部の袋詰め製品の販売
『地場で採り母ちゃんがつくりました』